

インド太平洋問題研究所がイベントを開催 駐日ウクライナ大使が講演

官民の枠を超えた知的・人的交流を通じて、アジア太平洋地域の

平和と繁栄を目指すNPO法人

「インド太平洋問題研究所」(RIPPA)。

本誌で連載を持つ箕原俊洋・神戸大学大学院教授が理事

長を務めている。

四月九日、兵庫県神戸市内でRIPPA主催のイベントが開催。

セルギー・コルスンスキー駐日ウ

クライナ特命全権大使が、「ウク

ライナ戦争の地政学的な余波と日本への影響」と題して講演を行った。

コルスンスキー大使は国立キール大学で物理・数学を専攻し、理学博士号を取得。母校で教壇に立った後、ウクライナ外務省へ入省し、外交アカデミーの院長として国際情勢を分析するなど、多方面で活躍してきた。

コルスンスキー大使は講演の冒頭、「二月二四日のロシア軍のウクライナ侵攻により、人類が長年築いてきた平和の秩序が破壊されてしまった」と語るとともに、「ロシア軍

による攻撃は、昨日今日計画されたことではない」と明言。ウラジール・プーチン大統領が誕生した社会的背景やプーチン大統領とアメリカの対立など、さまざまな事例を国際政治の視点から時系列に沿って分析した。

その上で今回の人道危機に際し、「日本では、前例のない規模でウクライナ支援がなされている」と日本への謝意を表明。続けて、「私は駐トルコ大使時代に、日本企業の卓越した建設技術を間近に見ている」と回想し、「母国ウクライナの復興には、長い時間がかかるゆえに、日本の官民が持つ豊富な知識・経験や高度な技術が不可欠であり、復興事業の中核を日本にも担ってほしい」と日本への信頼と期待を語り、話を結んだ。

主催者あいさつに立った箕原理事長は、ラテン語のRIPPA理

念「Cogitamus, ergo agimus」(われ考ふる。ゆえに、われ行動せり)を紹介。「私たちRIPPAは、(思考するシンクタンク)の枠組みを超え、(行動するアクションタンク)として、世界の平和はもとより、ウクライナ支援にも一層注力していきたい」と所信を表明した。

講演後、コルスンスキー大使は、マスコミ各社の取材に応じた。「今後、日本に望まれる支援は」との問いに、「ウクライナには美しき町が多数あり、多くの市民は日本人がとてもしんどい」と日本人の印象について言及。「ウクライナ大使館としては、両国の友好を一層推進すべく、経済・教育・文化交流、観光振興への連携強化などに期待している。一例としては、両国自治体による姉妹都市提携を推進してはどうか」と述べた。

過酷な苦難に屈することなく、復興の歩みを日本と共にすることを目指すウクライナ。これからも、官民を挙げた持続的な支援が求められる。



講演するコルスンスキー大使(左)